国際社会学部―東南アジア第一地域（島嶼部）

海と島が織りなすつながりの世界

東南アジア第 1 地域が対象とする島嶼部東南アジアは、太平洋とインド洋というふたつの太陽の間に位置する、世界最大級の海と島の世界です。島嶼部の 6 カ国（インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、ブルネイ、東ティモール）には 4 億以上に及ぶ人びとが暮らしています。

島嶼部東南アジアの海は、古来よりさまざまな人びとやモノが行き交う十字路でした。相異なる背景をもつ人びとが出会い、関わりあう過程で、「アジアの縮図」ともいえるような、多様な文化が混じり合いつつ生き生きと共存する魅力的な地域が形成され、今日に至っているのです。

「多様性の中のゆるやかなつながり」や「柔軟で開放的なネットワーク」など、私たちが島嶼部東南アジアから学びうる価値観は少なくありません。島嶼部東南アジアから世界を見つめ直してみませんか？

インドネシア共和国	マレーシア	フィリピン共和国	シンガポール共和国	ブルネイ・ダルサラーム国	東ティモール民主共和国

ASEAN（東南アジア諸国連合）

東南アジア諸国が加盟する地域共同体。1967 年にインドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイの 5 か国で設立されました。その後、1984 年にブルネイ、1995 年にベトナム、1997 年にラオスとミャンマー、1999 年にカンボジアが加盟し、現在では 10 か国が正式に加盟しています。2022 年に東ティモールの加盟が原則的に承認され、2023 年から東ティモールは ASEAN 諸会議にオブザーバーとして参加するようになり、2024 年までの正式加盟に向けての準備が本格的に進んでいます。

ASEAN の最高意思決定機関は ASEAN サミット（ASEAN 首脳会議）。ASEAN 事務局はインドネシアのジャカルタに置かれています。2015 年に、ASEAN 政治・安全保障共同体（APSC）、ASEAN 経済共同体（AEC）、ASEAN 社会・文化共同体（ASCC）の 3 つの共同体で構成される ASEAN 共同体の発足が宣言されました。

自然と地理―海と島と森の世界

島嶼部東南アジアとは、大陸部東南アジアの南東部に位置し、アジアとオーストラリアというふたつの大陸と、太平洋とインド洋というふたつの大洋に囲まれた地域を指します。海域東南アジアとも呼ばれます。インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、ブルネイ、東ティモールの 6 か国を島嶼部とみなすと、その面積は約 256 万 km²、人口は 4 億人を超えます。

自然環境から見ると、まず、島嶼部東南アジアは海と島の世界です。世界最大級の多島海が広がり、ニューギニア、ボルネオ（カリマンタン）、スマトラ、スラウェシ、ジャワ、ルソン、ミンダナオなどの大きな島の間に多数の中小の島が連なっています。

次に、島嶼部東南アジアは熱帯林の世界でもあります。スマトラ、マレー半島南部、ボルネオ、フィリピン諸島東部などでは 1 年中降雨が多く，多様な樹種と膨大な生物量をもつ熱帯雨林が発達しています。他方、東ジャワ以東の地域などには、はっきりとした乾季があり、樹種や生物量がより少ない熱帯モンスーン林が広がります。さらに東のティモール島などでは、草原と疎林というサバンナも展開します。

民族・言語・宗教―多様性の共存

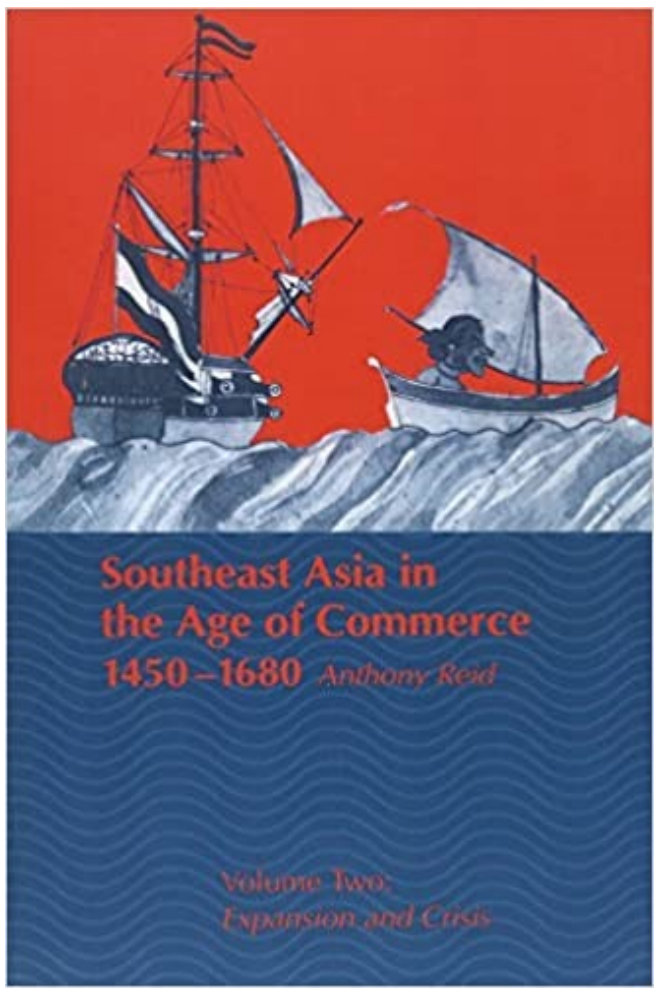
島嶼部東南アジアの民族の多様性とつながりは、人びとの移動や外部世界との交流を通じて、歴史的に形づくられてきました。広義のマレー系として包摂されうる島嶼部の先住の人びとは、ジャワ、スンダ、マレー、タガログ、セブアノなど、様々な民族としてのアイデンティティを形成してきました。華人、インド人、アラブ人などのかつての移民の子孫とみなされる諸集団も存在し，シンガポールでは華人が多数派になっています。時として摩擦がありながらも、多様な人びとが関わりあいながら共存してきたのが、島嶼部世界だといってよいでしょう。

島嶼部は多言語世界でもあります。マレー語、ジャワ語、タガログ語など、土着の諸言語の大半はオーストロネシア語族に属します。例外はマレー半島内陸部のオーストロアジア語族の諸語、ニューギニア島とその周辺のパプア諸語などです。中華系やインド系の諸語の使用も見られます。旧植民地宗主国の言語の影響力もあり、とりわけ国際語となった英語が最も広く用いられています。国語、地方語、外来系言語、国際語が並存し、複数言語を話せる住民が多いのも島嶼部東南アジアの特徴といえるでしょう。

宗教や信仰も一様ではありません。最大の信徒数をもつのはイスラームです。インドネシアが一国として世界最大のムスリム人口をもつほか、マレーシアとブルネイでもムスリムが多数派です。フィリピン南部ではムスリムが政治的自治を求めてきました。他方、人口の大半がカトリックのフィリピンと東ティモールをはじめ、多数のキリスト教徒も存在します。各国の中華系住民の間では仏教・儒教・道教の信仰も見られ、インド系社会やバリではヒンドゥー教徒が目立ちます。世界宗教が流入する以前から存在した精霊信仰の影響力も無視できません。時として宗教間に対立が生じることもありますが、都市の一つの通りにイスラームのモスク、キリスト教会、仏教寺院などが共存するような風景も見受けられるように、多宗教が共存してきたことも島嶼部世界の重要な側面でしょう。

歴史―重なり合う「海の時代」と「陸の時代」

島嶼部東南アジアの歴史には、大まかに分けると「海の時代」から「陸の時代」へという展開が見られます。いや、より正確には、「海の時代」の特色を色濃く残しつつ、「陸の時代」に入っていったというべきでしょう。

「海の時代」の島嶼部東南アジアでは、海や河川を通じて人やモノが移動し、政治権力の及ぶ範囲は伸び縮み可能で、はっきりとした国境がありませんでした。まず、5 世紀頃～14 世紀頃の古代国家の時代には、自給的な生産活動と海上交易を特徴とする国家が成立し、「インド化」と呼ばれるインド文化の受容が見られました。続いて、15 世紀頃～19 世紀前半に近世の諸国家が発展しました。15 世紀から 17 世紀にかけての「交易の時代」には、港市国家による国際交易が急速に拡大しました。商業活動の拡大と並行して、港市国家の王やその臣民がイスラームに改宗し、13 世紀末から始まっていた島嶼部の「イスラーム化」が進みました。16 世紀頃からは西欧諸国が交易拠点を求めて植民地支配を始めました。その影響で、一部地域では「カトリック化」が進みました。

19 世紀後半以降、「海の時代」の影響を強く残しつつも、内陸部の植民地化が進み、近代国家による統治と経済開発が展開しました。「陸の時代」の始まりです。欧米列強による植民地支配が、点の支配から面の支配へと拡大し、島嶼部は国境によって分割されました。近代国家の統治機構が持ち込まれ、輸出用の作物や鉱物の大規模生産が進みました。アジア太平洋戦争期には日本軍による占領も経験しています。他方、植民地支配を受けた人びとの間で民族解放の動きも生じるようになり、第 2 次世界大戦後、島嶼部の植民地は順次独立を獲得していきます。独立後は国民国家の形成と経済開発が進められました。独立後の島嶼部諸国の間では対立と協力が見られました。冷戦構造の下、1960 年代前半には島嶼部諸国の間に対立が生じましたが、1967 年に ASEAN（東南アジア諸国連合）が結成されるなど、域内の平和共存の道が模索され、今日に至っています。